

佐賀女子短大
研究紀要
第47集別刷
(2013)

和製英語の日本語化のプロセスについて
—和製英語の語構成による分類と品詞の転換—

On the Process of *Wasei-Eigo* Becoming Japanese:
the Classification of the Structures
of *Wasei-Eigo* and the Transformation of Parts of Speech

楊 劍

Yang JIAN

和製英語の日本語化のプロセスについて

—和製英語の語構成による分類と品詞の転換—

楊 剣

On the Process of *Wasei-Eigo* Becoming Japanese: the Classification of the Structures of *Wasei-Eigo* and the Transformation of Parts of Speech

Yang JIAN

はじめに

2012年4月から特別研究生として、協定校である佐賀女子短期大学で4ヶ月にわたる留学生生活を送った。目的は日本人によるさまざまな日本語の表現や日本語の教授方法、日本文学、日本の短期大学の科目設定等について研究するため、そのために、キャリアデザイン学科や日本語別科の設置科目から日本語や英語の授業をそれぞれいくつか受けた。本当にいい勉強になった。先生方はみな真面目で、学生たちのために細かいところまで気が行き届いていた。とくに、日本語別科の授業で、留学生たちの日本語が上達できるように、根気よく続けているいろいろ工夫していた熱心な仕事ぶりに非常に感心させられた。

それに、日本の事情や日本文学や日本文化に関して、「日本人の自然観」「上下関係の厳しさから見る日本の社会文化」「詩を通して、東西文化の共鳴を求める」「日本の大学生の勉強態度」「日本の少子化現象」等いくつかの話題にも関心を持つようになった。ただし、筆者は日本語教育を専門とするので、日本語の文法等の勉強にとくに興味を持っている。したがって、以下は、外国人日本語学習者の視点から、先生方も学生達も授業中頻繁に使われている外来語について考察してみたい。

日本語別科の授業で、時々カタカナ語が聞こえてきた。例えば、「蜘蛛」を「スパイダー」、「試す」を「チャレンジ」、「熟語」を「イディオム」、「文脈」を「コンテキスト」、「忠告する」を「アドバイスする」、「鶏」を「チキン」、「硬貨」を「コイン」、「中継放送」を「ライブ放送」、「作り話」を「フィクション」、「肯定的」を「ポジティブ」、「魔法」を「マジック」、「ごまかし」を「トリック」、「修辞」を「レトリック」と言う。

最初は、それはたぶん留学生たちが知っている日本語の単語に限られているし、英語ならば国際語としてどの国の人であっても少しできると考えられているし、留学生たちがある問題についてどうしても理解できないことから、教師が仕方なくカタカナ語で説明したのであると思った。しかし、その後、ある日、本科生の授業（つまり日本人の学生向けの授業）で、エビデンスとい

う言葉が耳に入った。「エビデンスってなんだろう？」とそのときは分からなくて困ったが、後に辞書で調べてようやく理解できた。英語の「evidence」は「証拠」という意味である。このように、授業中では教師と学生達の対話の中ではカタカナ語がしばしば使われている。

こうしたことから、筆者は日本語のカタカナ語の意味用法等に関心を持つようになった。

図書館で『カタカナ語を英語にする辞書 一和製語から通じる英語へー』という本を通して、狭義の外来語、つまりカタカナ語の使用事情が一応分かってきた。その本に載せられたカタカナ語は全部で2933語もあり、日本の文部省が規定した常用漢字①よりも多いのである。五十音図の順によって、それぞれの語例は表1のように表れている。

表1 『カタカナ語を英語にする辞書 一和製語から通じる英語へー』に載せたカタカナ語

ワ 41	ラ 62	ヤ 8	マ 90	ハ 210	ナ 24	タ 82	サ 80	カ 83	ア 147
	リ 46		ミ 37	ヒ 96	ニ 21	チ 44	シ 141	キ 57	イ 62
	ル 15	ユ 14	ム 7	フ 231	ヌ 7	ツ 12	ス 172	ク 63	ウ 38
	レ 48		メ 41	ヘ 97	ネ 20	テ 109	セ 87	ケ 21	エ 55
	ロ 40	ヨ 7	モ 36	ホ 125	ノ 56	ト 103	ソ 17	コ 94	オ 87

こうなると、佐賀女子短期大学国際交流センター室に置かれてある本のタイトルがカタカナであるものが少なくないことに気付く。『アンナ・カレーニナ』『エスプリとユーモア』『ワークショップ』『パイナップリン』『ジャーナリスト』『雨ニモマケズ』『狐狸庵 VS マンボウ』『カウンセリング入門』『レポートの組み立て方』『よのなかのルール』『日本の政治のエリート』『日本のビール』『ドン・ファンその反逆の生態』『日本人のロシア・コンプレックス』『テストの話』『ニッポンの評判』『トンデモ国家、中国の驚くべき正体』等たくさんある。

また、新聞を読んで見てもカタカナはたいへん多く目に入った。2011年6月12日の『西日本新聞』を例に数えれば、政治10語、経済173語、社会120語、文化36語、総合13語、総合・国際66語、社説・意見23語、番組・娯楽109語である。これ以外にも、スポーツや広告にはカタカナで表記する言葉がさらに多くて数えきれないほどになった。もちろん、「スペイン」、「ギリシャ」、「ポルトガル」、「メキシコ」、「アナン」、「アサド」、「ユーロ」のような地名・人名、団体組織名等の固有名詞が多い。ところが、「スタート」（出発）、「プラン」（計画）、「ケース」（事例）、「マーク」（印）、「ルール」（規則）、「ビジネス」（商売）、「イメージ」（印象）のような日本語でもともと存在している言葉でもカタカナで表記するのも少なくない。

また、カタカナで表記する言葉は文章や新聞などの書物にしか使われていないというわけではなく、日常生活でもカタカナ語はよく見られ、佐賀女子短期大学の近隣商店でも名称にカタカナ語を使用したものが多い。「マルキョウ」、「コスモス」、「モリナガ」、「イオン」、「ダイソー」、「ミスターミックス」、「モラージュ」、「ゆめタウン」、「ミドリ薬品」、「コクミン」等がすぐ挙げられる。

これらのようにカタカナで表記する日本語をどう呼称するのか調べてみると、カタカナ英語と言われたり、和製英語と言われたりしているのである。以下では、カタカナ英語と和製英語の区別について考え、そして和製英語という概念を検討してみたい。そして、日常生活の衣食住の分

野に和製英語がどのように浸透していったのか。和製英語が日本人の生活にこれほど多用されるようになった理由は何か。和製英語の語構成による分類を通して、和製英語と英語の発音の相違を説明し、和製英語の品詞転換や和製英語の日本語化の仕組みについて考察することにする。

1. 和製英語とは何か

以上述べられたカタカナで表記する言葉は、最初は「外来語」と呼ばれた。外来語とは、もと、外国語だったものが、国語の中に取り入れられた言葉。狭義では、欧米語からのそれを指す。例、ガラス・パン・ピアノなど（『新明解国語辞典』2010）。

最近「カタカナ語」という呼び方が出てきた。カタカナ語というのは表記が「カタカナ」であることを強調した言い方である。そのような「カタカナ語」のうち英語は約90%を占めて（野田 1998）、「カタカナ英語」という言い方もされている。「カタカナ英語」は果たして日本語であるか、それとも英語であるか、それを説明するために、田辺洋二氏は「和製英語」という概念を提唱した。

カタカナ英語とは、外来語として「独立する前の段階のもの」ということになる。そして実は、このカタカナ英語から、意味と発音が日本的にゆがめられた「和製英語」が生まれてくるのである。「ワードプロセッサ」といえば「カタカナ英語」であり、「ワープロ」といえば「和製英語」である。

「和製英語」とは、英語として通用するだろうという推測の下に日本人が用いた英語らしい単語で、実際には英米人には通用しないもの。例、プッシュホン・テーブルスピーチ・ガソリンスタンドなど（『新明解国語辞典』2010）。つまり、英語の単語を組み合わせることにより造られた、英語のふう聞こえるが英語のネイティブスピーカーには通じない外来語の語句・表現のことである。

前節で述べられた辞書、文章、新聞、看板などにたくさん使われた様子からすると、最近の和製英語の急増ぶりは、ただただすさまじいの一語に尽きると言われているが、一体どれほど頻繁に使われているか分かるために、その次、日常生活における和製英語の使用事情を調べて、和製英語を日本社会への浸透力を見てみよう。

2. 和製英語の使用状況

本節では、日常生活の衣食住の三つの分野に分けて、和製英語の使用事情を詳しく考察する。

まずは、衣服に関する和製英語である。それは今多く出版された服装に関する日本語辞典を読むと、推測できると思う。服装に関する日本語辞書が非常に多い。以下は『服装辞典』（文化出版局 1996）という辞書を紹介する。この辞書に出た単語は全部で1万語以上であり、またほとんどは和製英語である。いちいち数えるには時間がかかるので、ここでは初文字「あ」である単語を例として調べてみたが、その結果として、全部で638語であり、その中に外来語が542語であ

る。そして、フランス語やベトナム語やラテン語やスペイン語などを除き、残った和製英語は492語であり、すべての単語の77.12%を占めている。それを通して、服装用語に和製英語が占めた割合の高さということが明らかになった。もとより、和製英語がたくさん載せられたのは、その辞書のみならず、他の服装日本語辞書にも同じような結果が見られる。例えば、『世界服装文化史辞典』（河鱒実英 昭和48）、『総合服装史事典』（丹野郁 1980）、『日英仏対照語付服飾辞典』（石山彰 1982）、『新田中千代服飾事典』（田中千代 1995）などである。読んでみると、みんな同じ結果が出た。つまり、服装用語に和製英語が多く使われるということである。服装用語に和製英語が大量に使われているのは、欧米のファッションが日本で流行っていて、日本人の装いに大きな影響を与えたということである。つまり日本人の生活が西洋化になった証拠の一つであると思われる。

そして、食物に関する和製英語である。それは、スーパーで買い物する時、注意してみると、ほとんどの商品名称がカタカナで表記していることに気付ける。

6月12日のレッドキャベツ（Red Cabbage）という店の宣伝紙を読んでみたら、食物に関する和製英語も表2のようにたくさん載せられたということがわかった。

表2 6月12日のレッドキャベツという店の宣伝紙に出た和製英語

バナナ、ゴールドキウイ、ホクトエリンギ、ホクトブナシメジ、エノキ、ナメコ、カイワレ、スプラウト、ミニトマト、アボカド、オレンジ、キウイフルーツ、ヨーグルト、ネスレアイスコーヒー、マンゴープリン、ドルチェ、サンキスト、オレンジ・グレープフルーツ、ベビーハム、コンソメ、ボトルコーヒー、キャベツ、ロースハムスライス、サラダマリアージュ、パスタ、ゴーヤ、デイリークラブティーバッグ、グリーンティー、ミルク、ミルクカロリーーフ、フルーツグミミックス、コラーゲン、フレンチパピロ、ジャンボチキンカツ、メンチカツ、カットパイ、ロールイカ、ハンバーガー、バーベキューソース、サラダ、エビ、ラーメン、ポークハムステーキ、イカ、デラウェアー、イワシ。

また、『日本食品大事典』（村田浩一 2008）という本を参考にして、食物に関する和製英語にすこし触れてみる。その本に食品に関するものを18大類、37小類に分けられて、各類の和製英語

表3 『日本食品大事典』に載せられた和製英語の割合

分類		和製英語語数(割合)	延べ語数
穀類	穀類	3 (21.4%)	14
	小麦加工品	3 (50.0%)	6
いもおよびでん粉類	いも類	0 (0.0%)	5
	でん粉類	0 (0.0%)	3
砂糖および甘味類	糖類甘味料	3 (42.9%)	7
	非糖類甘味料	6 (100.0%)	6
豆類	豆類	1 (8.3%)	12
	大豆加工品	1 (7.7%)	13
種実類	種実類	7 (29.2%)	24
野菜類	野菜類	37 (31.9%)	116

和製英語の日本語化のプロセスについて (楊 剣)

	山菜類	0 (0.0%)	126
	ハーブ類	12 (100.0%)	12
	漬物類	3 (10.0%)	30
果実類	果実類	39 (48.1%)	81
きのこ類	きのこ類	3 (9.7%)	31
藻類	藻類	0 (0.0%)	23
魚介類	魚類	9 (6.9%)	130
	貝類	3 (9.1%)	33
	甲殻類, いか・たこ類ほか	0 (0.0%)	12
	水産練り製品	2 (28.6%)	7
肉類	肉類	0 (0.0%)	28
	肉類加工品	12 (92.3%)	13
卵類	卵類	0 (0.0%)	6
乳類	乳類	0 (0.0%)	4
	乳製品	5 (55.6%)	9
油脂類	植物油脂	6 (35.3%)	17
	動物油脂	0 (0.0%)	4
	加工食物油脂	3 (60.0%)	5
菓子類	和菓子類	4 (69.0%)	58
	中華菓子類	1 (33.3%)	3
	洋菓子類	33 (97.1%)	34
嗜好飲料類	アルコール飲料類	6 (33.3%)	18
	非アルコール飲料類	3 (23.1%)	13
調味料および香辛料類	調味料	10 (45.5%)	22
	香辛料	26 (83.9%)	31
加工食品	加工食品	4 (28.6%)	14
	そのほかの食品類	2 (25.0%)	8

の比率は表2を見てすぐわかる。

和製英語は全部で247語で、延べ語数の878語の28.13%占めた。非糖類甘味料、ハーブ類、肉類加工品、洋菓子類と香辛料などの分野に多く使われていることが明らかになった。肉類加工の技術や設備等の引き入れも一応推測できると思う。西洋の技術や文化などを輸入するに伴って、日本人の食文化がどのように西洋化してきたかもそれを通して少し理解できるであろう。

また、住宅に関する和製英語である。それも建築用語に関する辞書を読むと、和製英語の多さから多少わかる。以下は『共立建築新辞書』（建築新辞典編集委員会 昭和53）という建築に関する日本語の辞書を紹介する。服装辞典と同じように、全部で何万語も載せてあり、一番多くのはカ行である。読んでみると、『共立建築新辞書』に載せたカ行の建築用語は全部で2083語であり、その中で和製英語は364語で、17.67%を占めている。そのデータを通して、24年前の1978年に和製英語がすでに建築という分野に浸透し始めたということに気が付いてきた。24年も過ぎた今日は、日本人の生活の西洋化につれて、建築に関する和製英語もさらに多くなった。

以上のデータからみると、和製英語が衣食住の大切な分野にたくさん使われるようになったこ

とが一応理解できる。それも、この数十年来、日本人の生活が次第に西洋化してきたからであろうと思われる。

言うまでもなく、和製英語は衣食住の分野どころでなく、他に経済、文化、教育、マスコミなど多くの領域にも徐々に進入してきた。

3. 和製英語が多用される理由

そのように、日本語における和製英語が氾濫した理由として、日本語学者たちの考えをまとめると、次の三つが指摘されている。

3.1 現実的な原因

マルクス主義の史的唯物論の基本概念によると、上部構造は経済基盤によって決められる。つまり、イデオロギーや政治・文化・法律等の諸制度はある程度の経済基盤の上に形成されるのである。言語も文化の一環として、その発展も経済的な要因に左右されることがある。

具体的に言うと、明治時代以降、日本は急速に現代化したり、西洋化したりした時代であり、欧米から文化や科学技術を取り入れた同時に、本格的に欧米から外来語も導入し始めた。やはり、その時期、英語圏の諸国の経済が著しく発展して、イギリスやアメリカなどが世界中に経済の発展がわりと速い国であった。経済が発展するにつれて、科学や文化などもそれなりに発展してきた、国際文化の主流を率いるようになった。それで、日本の科学、文化なども英語圏の諸国の影響をすこしずつ受けるようになった。そして、生活などの西洋化に伴って、日本でそれまで見たことがない物もどんどん輸入された。そのような昔の日本語で存在していなかった物は、日本語で表記したくても、表記できなかったのも、仕方なく英語を借りて表現するしかない。従って、カタカナ語で表記した専用名詞がたくさん出てきた。英語が次第に現代人の生活のなかで、もっとも広く使われている国際語になった。他国の先進的な文化や技術などを吸収して、自国なりに創造するのがとても得意だと言われている日本人が自国の言語の中に英語を多く引き受けた。つまり、私たちが狭義で呼ばれた外国語である。ただ、英語をそのままカタカナで借りて、発音を元の英語のままにすれば、長すぎて覚えにくいものが多くなった。例えば、「パーソナルコンピューター」(personal computer) は12シラブルもあって、生活リズムが非常に速い日本社会にとっては長すぎた。そこで4シラブルの「パソコン」という和製英語に落ち着いたというわけである。また、日本人は英語を引き受けた後で、適当に自国の言語の特色をつけて新しい単語を作り出すこともある。品詞の転換もその一種である。例えば、「マスターする」という単語がある。それはもともと英語では「マスター」(Master) が名詞であるが、日本語に引き受けた時、一つの和製英語で動詞として使われるようになった。

3.2 歴史的な原因

歴史的な原因として、漢字の使用制限と英語教育の普及と二つのことが見られる。

和製英語の日本語化のプロセスについて（楊 剣）

第二次世界大戦が終わった昭和二十年以後、日本は敗戦国として、戦勝国アメリカから派遣された教育使節団の勧告の下に性急に実施された漢字の使用停止を究極の目的とする当用漢字表を見直す作業や、多くの矛盾を含む仮名遣いの規則などの再検討が、ようやく始まったのである。その後、当用漢字表を改めて、常用漢字表として評価し直してみても、日本人全体の漢字に対する冷淡な態度は簡単には変わらなかった。また戦後の漢字排斥運動の陰の立役者であったアメリカ教育使節団が、ローマ字の早期採用を日本人に強く勧めた（鈴木孝夫 1999）。

さらに、第二次世界大戦後、英語教育が普及して、昔は極少数の国民しか英語を勉強できなかったが、戦後に英語教育は義務教育となり、英語が多少できる日本人が昔よりずっと多くなった。今では簡単な物なら、英語で表現できる人が増えてきた。

漢字使用の抑えと英語教育の主張を組み合わせ、和製英語が少しずつ増えるようにいいチャンスを提供した。

3.3 意識的な原因

和製英語が日本人の日常生活に出てきたのは、日本人の意識にもかかわっていると思われる。日本人は新しがり屋なので、外来の事物に対して旺盛な好奇心を持っている。第二次世界大戦後、国際影響力によって、この新しさの提供元が欧米と決まっている。日本人の意識には、いつも欧米を手本として努力して、先進諸国の仲間入りをしている。もちろん、その意識が言語の使用にも表れてきた。外来語（特に和製英語）の氾濫は、日本語と英語の言語戦争で日本語が負けたという日本人の意識によると言っても言い過ぎではない。日本人が日本語に対する劣等意識を持っているわけではないであろうか。外来語（特に、英語）の方がカッコよくて使うと、エリートになれるという思想が日本の社会を支配して、若者を主として英語表示を歓迎する人が多くなった。

様々な理由で、多く使われているようになった和製英語は日本語の一部として、一体どのような特徴を持っているか。次の節では、和製英語の語構造による分類と品詞転換から和製英語の日本語化を考察してみよう。

4. 和製英語の日本語化

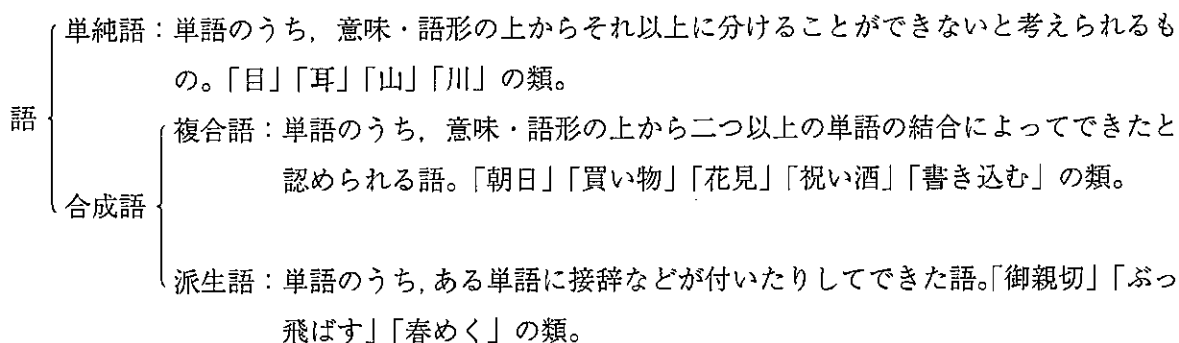
日本語に氾濫する和製英語は、英語のネイティブスピーカーにそのまま言ってしまうと通じないものばかりである。中には、日本語では変に省略してしまっていて、英米人にはフルで言わないと伝わらない、というものがたくさんある。典型的な例としては前文に述べられた「パソコン」。英米では「personal computer」と略さずに言わないと伝わらない。

外来語も和製英語も確かに数多くて一度全部考察するのは無理なので、本節では「和製英語・カタカナ英語辞典というサイト」②に収録した和製英語を詳しく見てみよう。このサイトでは、ふだん日本語の会話の中でよく使われている和製英語を集めた。

それから、語構成によって、以上言及された「和製英語・カタカナ英語辞典というサイト」に収録した和製英語を分類する。また、その中に出てきた和製英語の品詞転換も考える。

4.1 和製英語の語構成による分類

語構成による単語の分類を以下のように分けられる。



和製英語はその意味を原語によって調べれば、単純語から直接導入された語と複合語から省略などによって間接的に導入された語がある。

4.1.1 和製英語の単純語

まずは、単純語から直接導入された語である。(115単語)

アメリカン, ウェット, エール, エスケープ, エナメル, カステラ, カラー, ガラス, カンニング, キャブ, ギャング, クーラー, グラビア, クラフト, グリーン, クリーム, ゲット, ゲラ, ココア, コック, コンセント, コンプレックス, サービス, サイン, サンプル, ジャー, ジャスト, シャツ, ジャンパー, ジュース, ショーツ, ジョッキ, ジンクス, スタイル, ステッキ, ストープ, スナック, スペル, スポンジ, スマート, スリッパ, センス, ソフト, ダウン, タレント, チャック, チャレンジ, テスター, テリトリー, ドキュメント, ドッキング, ドライ, ドラマ, トランク, トランプ, ネット, ノート, ハード, ハーフ, ハイキング, ハイヤー, パターン, パネラー, パパ, ママ, バラック, パン, パン, バンガロー, パンツ, ハンディー, ハンドル, ピンセット, ファイト, ブービー, ブーム, ブラインド, プリント, プログラム, プロダクション, プロマイド, フロント, ベニヤ, ペンション, ペンチ, ポスト, ホチキス, ポット, ボンネット, カバー, マスター, マニア, マヌカン, マンション, ミス, ミルク, ミンチ(メンチ), ムーディー, メーカー, メロン, メンバー, モルモット, ヤンキー, ヨット, ライン, ラガー, ラッパー, ルーズ, レクチャー, レコード, レッテル, レンジ, レントゲン, ロース, ロータリー

それに、原語は単純語であるが、導入された時に、和製英語としては、一部分省略したこともある。それぞれ単語の頭部省略と尾部省略に分けることができる。

(1) 頭部省略 (3単語)

コーラ (コカコーラ), ニス (ワニス), バイク (モーターバイク)

(2) 尾部省略 (23単語)

アジ (アジテーション), アパート (アパートメント), アポ・アポイント (アポイントメント), インテリ (インテリゲンチャ), インフレ (インフレーション), オーバー (オーバーコート), クロック (クロックローム), コンテ (コンティニューイティ), サボ (サボ

タージュ), サンド (サンドイッチ), スーパー (スーパーマーケット), スト (ストライキ), センチ (センチメートル・センチメンタル), デノミ (デノミネーション), デパート (デパートメント), デフレ (デフレーション), デマ (デマゴギー), テレビ (テレビジョン), トイレ (トイレット), ネゴ (ネゴシエーション), パンク (パンクチュア), ビル (ビルディング), ロス (ロスアンゼルス)

4.1.2 和製英語の合成語

複合語

(1) 結合型: 標準英語があるのにもかかわらず日本人の視点から独自に英単語を組み合わせたもの。(98単語)

オーナードライバー, オーペンカー, オールドミス, オールバック, ガードマン, ガールハント, ガソリンスタンド, カッターシャツ, ガッツポーズ, カレーライス, キャッチフレーズ, キャンピングカー, クリームソーダ, ゲイボーイ, ケースバイケース, ゲートボール, コインランドリー, コインロッカー, ゴールイン, ゴールデンアワー, ゴールデンウィーク, コストパフォーマンス, サラリーマン, ジェスチャーゲーム, シャープペンシル, シュークリーム, ショベルカー, シルバーシート, シンボルマーク, スキンシップ, スタートライン, スタンドバー, スタンドプレー, ターミナルホテル, タッチアウト, タンクローリー, ダンプカー, チェンジレバー, テーブルカバー, テーブルスピーチ, デコレーションケーキ, デッドヒート, トークショー, ドライブウエー, ネイティヴチェッカー, ネームカード, ネームバリュー, ネクタイピン, ヴァージンロード, バーゲンセール, ハイウエイ, ハイテンション, バイバイ, ハイボール, バキュームカー, バックスキン, バックミラー, ハローワーク, パワーアップ, ハンドメイド, ブックカバー, フライパン, フリーサイズ, フリーマーケット, プレイガイド, フロントガラス, ペアルック, ベースアップ, ペーパードライバー, バッドカバー, ベッドタウン, ベビーカー, ホームシック, ボールペン, ボストンバッグ, ホットケーキ, ボディーチャック, マイカー, マイベース, マンツーマン, ミルクコップ, メモリアルデー, モーターボート, モーニングサービス, モニター, ライターオイル, ライターストーン, ライブハウス, リストアップ, リフォーム, ルームクーラー, レベルアップ, ローティーン, ロードショー, ロープウエー, ロールパン, ワイシャツ・Yシャツ, ワンマン

(2) 省略型

①第一要素 (二語からなる複合語であれば, 左側の語) が短縮のタイプ (4単語)

アドバルーン (アドバタイズメント・バルーン) エンゲージリング (エンゲージメント・リング), パトカー (パトロール・カー), ルポラーター (ルポルターージュ・ライター)

②第二要素 (二語からなる複合語であれば, 右側の語) が短縮のタイプ (8単語)

ウーマンリブ (ウーマン・リバレーション), オートバイ (オート・バイク), ステーションビル (ステーション・ビルディング), ターミナルビル (ターミナル・ビルディング), フリーター (フリー・アルバイト), マスコミ (マス・コミュニケーション), ミニコミ (ミニ・コミュニケーション), エアコン (エア・コンディショナー)

③短縮語が組み合わされたタイプ（複合語の第一要素，第二要素ともに短縮されて作られた和製英語）（18単語）

オーエル（オフィス・レディー），オービー（オールド・ボーイ），ガード（ガーダー・ブリッジ），Gジャン・ジージャン（ジーンズジャンパー），Gパン・ジーパン（ジーンズパンツ），セクハラ（セクシュアル・ハラスメント），WCダブリューシー（ウオーター・クロゼット），DPEディーピーイー（ディベロップメント・プリンティング・エンラージメント），パーマ（パーマネント・ウエーブ），パソコン（パーソナル・コンピューター），パンスト（パンティー・ストッキング），PRピーアール（パブリック・リレーションズ），プロレス（プロフェッショナル・レスリング），ボディコン（ボディー・コンシャス），マイコン（マイクロ・コンピューター），マザコン（マザーコンプレックス），ミシン（ソーイング・マシーン），ワープロ（ワード・プロセッサー）

派生語

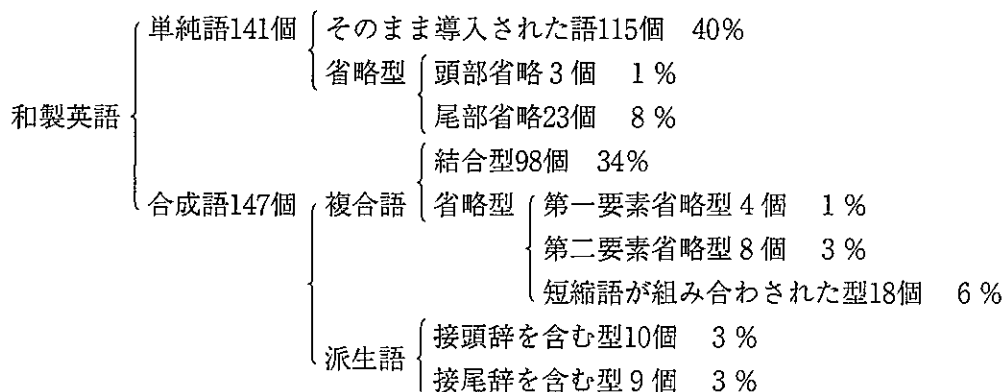
(1) 接頭辞を含むもの（10単語）

アフター：アフターサービス
 スーパー：スーパーマーケット，スーパーストア
 ハイ：ハイウエイ，ハイテンション
 ポスト：ポストプロダクション，ポストモダン
 マイ：マイカー，マイペース
 ロー：ローティーン

(2) 接尾辞を含むもの（9単語）

アップ：イメージアップ，パワーアップ，ベースアップ，リストアップ，レベルアップ
 アウト：タッチアウト
 カバー：テーブルカバー，ブックカバー，ベッドカバー

和製英語の語構成による分類の単語の例から，それぞれの構成方式が占める比率がわかる。やはり，原語からそのまま導入された単純語に，原語の発音を変えずに，二つの単語を組み合わせる結合型を加えてみれば，だいたい74%を占めて，多いであるが，省略型が約19%あるので，流行っているようである。



4.2 和製英語の品詞の転換

和製英語は基本的名詞として導入された。その中の一部分の単語は日本語化されて、日本語に帰化した。たとえば、「フリーズする」は「フリーズ」に「する」を補って、日本語として動詞になり、また「スマートな」は「スマート」に「な」を補ってはじめて形容動詞になることができる。つまり、和製英語もとの品詞が変化した。これは和製英語の品詞の転換と考えても理解できると思われる。それでは、「和製英語・カタカナ英語辞典というサイト」に示された和製英語の品詞の転換を一応見てみよう。

①動詞化：「る」或いは「する」が和製英語に付いて、動詞になる。(23単語)

アジる、イメージアップする、エスケープする、カンニングする、ゴールインする、サービスする、サインする、サボる、スリップするダウンする、チャレンジする、ドッキングする、ノートする、ハイキングする、パワーアップする、プリントする、プログラムする、カバーする、マスターする、モニターする、リストアップする、リフォームする、レクチャーする、レベルアップする、

②形容動詞化：一部分の和製英語は形容動詞になることができる。その和製英語に「な」を付けて、連体修飾語として使うことができる。(8単語)

オーバーな、センチメンタルな、ソフトな、ドライな、ハードな、ハンディーな、ムーディーな、ルーズな

品詞の転換から考えれば、動詞化された単語が23個で、形容動詞化された単語8個より多いし、加えてみると、31個で、延べ語数の10%を占めるようになった。つまり、和製英語が日本語に帰化する傾向が強くなる。

日本語の和製英語の規則を分析してみれば、大部分の和製英語（約74%）は英語の発音とよく似ているので、私たちが和製英語を学ぶ時は、英語を借りたほうがいいであるが、しかし、省略されたり、日本語に帰化されたりすることもあるので、日本語としての独特のところにも注意しなければならない。

5. おわりに

グローバル化に伴って、和製英語が絶えず増えていて、日本語における重要さも人々に認められた。和製英語についての勉強もいっそう大きな役割を果たすようになった。本稿は和製英語の定義、使用事情、頻繁に使われた理由と日本語化するプロセスを検討してみて、和製英語を勉強する時の注意点も少し触れた。英語がすこしできる私たちが外来語を勉強するのは、とりわけ和製英語を覚えるのはそれほど難しいことではないと思うが、しかし、英語と和製英語がやはり決定的な発音の違いがあるということには気をつけねばならぬ。

ところが、本稿はやはりいろいろな不足なところがあると思う。まず、ただ外来語の中の和製英語を簡単にまとめたが、実は日本語の外来語は英語だけでなく、フランス語、ドイツ語、オラ

ンダ語などから導入されたものも多い。広義の外来語は中国語も含めている。それから、参考対象としての「和製英語・カタカナ英語辞典」における和製英語が限られているので、和製英語を明らかに説明できないような気がする。また、外来語の複合詞は、英語と英語だけでなく、英語と日本語など他の組み合わせもある。たとえば、電気レンジ、電気スタンド。外来語は日本語の重要な一部分として、一言で簡単に説明できるものではないが、これからの研究課題として進めたい。

注

- ①2010年11月30日に平成22年内閣告示第2号「常用漢字表」として内閣告示された。従来の常用漢字表から196字を追加、5字を削除し、2136字からなっている。
- ②「和製英語・カタカナ英語辞典」<http://www.waseieigo.com/>

参考文献

- (1) 丸山孝男, 小林忠夫, 山崎千秋, 寺内正典『カタカナ語を英語にする辞書 一和製語から通じる英語へー』大修館書店 1992年
- (2) 三省堂『新明解国語辞典第6版』2010年
- (3) 野角幸子『日本社会にあふれるカタカナ語』新風舎 1998年
- (4) 岩崎春雄他『英語の常識百科』研究社 1987年
- (5) 鈴木孝夫『日本語と外国語』岩波書店 1999年
- (6) 文化出版局編『服装辞典』文化出版局出版 1996年
- (7) 丹野郁『総合服装史事典』雄山閣出版株式会社 1980年5日
- (8) 河鱒実英, 野村久康, 佐藤潔人『世界服装文化史辞典』東京堂出版 昭和48年
- (9) 田中千代『新田中千代服飾事典』同文書院 1995年
- (10) 石山彰『日英仏対照語付服飾辞典』ダウイッド社 1982年
- (11) 村田浩一, 平宏和, 田島真, 安井明美『日本食品大事典』医歯薬出版株式会社 2008年
- (12) 建築新辞典編集委員会編『共立建築新辞書』共立出版株式会社 昭和53年
- (13) 『英語化する日本社会』ハーバート・パッシン著徳岡孝夫訳サイマル出版会 1982年
- (14) 皮細庚『日语概説』上海外语教育出版社 1997年
- (15) 姫田信也「和製英語の複合語について」龍谷大学国際センター研究年報 2005年3月
- (16) 鈴木真喜男『新編日本語要説』学芸図書株式会社 2006年
- (17) 小林千草著『現代外来語の世界』朝倉書店 2009年
- (18) 崔崑『現代日語语言学概论』外文出版社 2009年